ユネスコエコパーク通信

東大生がまちの課題調査を開始！

東京大学の学生が地域の課題解決に取り組む「フィールドスタディ型政策協働プログラム」の一環で、3人の学生が9月5日から15日間、綾町で調査活動を行いました。このプログラムは、多くの関係者と協力しながら国や企業、地域で政策を立案・実行できるリーダー人材を育てることを目的に、本年度から始まったもので、約50人の学生が全国各地に派遣されています。

綾町を訪れたのは、小林万有さん（文学部）、伊藤慶さん（薬学部）、石田晴輝さん（教養学部）。「ユネスコエコパークの認知度向上」をテーマに掲げた3人は、町職員から豊かな生態系を守る環境保全の取り組みや自然生態系農業の推進などについて説明を受け、聞き取り調査を始めました。

宮崎大学のイシガメ調査を興味深く見学する3人

調査活動では、里山の原風景が残る上畑地区を小西俊一館長の案内で巡り、狩猟や農業といった自然と調和した生活文化を肌で感じたほか、公民館長会をはじめ地域で行われた会合などにも積極的に参加し、多くの住民の皆さんから話を聞いていました。また、綾小・中学校や農家なども訪問しました。

農業、観光、移住、教育など幅広い分野におけるまちの取り組みについて理解を深めた学生たち。「小さなまちでありながら、多様なまちづくりの取り組みが数十年も続いていることにびっくり」「どの課題を掘り下げて調査研究するか悩みますが、国内外の事例などをもとに実現性のある提言ができれば」「農業分野や観光業における、ビッグデータや人工知能の活用も考えられるのでは」などと話していました。

早川農苑で自然生態系農業について話を聞きました

綾町での活動はあと3回行われる予定で、来年3月には地域活性策が提案されることになっています。鋭い視点と若者らしいアイデアによる政策提言に期待します。

コラム Column

ヒメネズミ

ヒメネズミは、木登りが得意な森の住民です。小さな体に不釣り合いな長いしっぽで器用にバランスを取りながら、木の上を素早く動き回ります。夜行性のため、昼間にその姿を目にすることはまずありません。

ドングリなど植物のタネや昆虫を好んで食べるヒメネズミは、集めた食べ物をさまざまな場所に運んでため込む習性を持っています。そうして土に埋められたドングリは、食べずに残される場合があり、そこから芽が出て次世代の森が作られます。小さくても、綾の照葉樹林の未来を育てる大きな役目を担う生き物なのです。